

公開講座「科学史とジェンダー」を開催しました

男女共同参画推進室は、2012年6月1日（金）、西早稲田キャンパス 52号館 104教室で、理工学術院 3 研究科とオープン教育センターの合同科目である「科学とジェンダー」の授業から、テーマ「科学史とジェンダー」を公開講座として開催しました。

生物学・医学史、科学とジェンダーに関する第一人者である小川眞里子先生（三重大学人文学部特任教授）を講師にお迎えし、第1部・第2部あわせて約60名の参加者がありました。

始めに、「科学とジェンダー」の授業コーディネーターである中村采女教授（理工学術院）による挨拶および本学の男女共同参画推進の取り組みの話があり、小川先生の講義が始まりました。

第1部は、「科学はジェンダー中立か？」と題して、私たちが見ているものが、単に目で見ているのではなく、見ているその人の背景、内部に想像を広げて解釈をしているのだということを、参加者への質問や意見を交えて、楽しくご紹介いただきました。18世紀当時に描かれた男女の骨格図を比較すると、男性は頭脳明晰を表すかのように頭が大きく、横には雄々しさの象徴である馬の図を配し「男らしさ」を表現しており、逆に女性は多産を想像させる大きな骨盤に加え、少しつま先立った骨格図でエレガントさすら表現された上に、横には多産であり脳が小さいダチョウを配することで当時の女性に求められていた役割が表現されていることを紹介されました。また、科学の言語にも浸透するジェンダーとして「卵子」には精子を「待つ」という表現をすることや、かつて蜂の分類に際して、たとえ産卵したとしても一族の長であるハチは「王バチ (King Bee)」とされていたことなども紹介されました。

第2部では、「ジェンダー化された自然：18世紀の博物学を題材に」として、リンネが提唱したジェンダーをもちこんだ生殖器官による植物分類について、おしべを基準に次にめしべという序列が、男性優位が当然とされていた時代背景から圧倒的な支持をされていたという史実とともに紹介をされました。次に、動物の分類においても人間は「乳房動物＝ママリア」とするというリンネの提言が、植物の分類と同様に時代背景と深い相関性があるとされ、18世紀当時のフランスでは「乳母制度（自分の手元で子供を育てず、生後間もない赤ん坊の9割が田舎の乳母に送られていた）」が全盛期であること、乳児死亡率が極めて高かったことから、「ママリア～乳房動物」という分類名をあてはめることで「子どもは乳母に預けるのではなく、自分で育てよう」という思想を後押しし、それ推し進める為に便利で大義に使いやすい言葉として18世紀の社会が選び取った綱名であることを解説していただきました。

そして、たとえ科学であっても、ジェンダー中立ではなく複雑な文化的基盤から立ち現れるのだと講義を結ばれました。

質疑応答では、今後ジェンダーバイアスを乗り越えた科学が存在するようになるのか、という質問に対し、小川先生は、現在はジェンダーバイアスのない考え方を促進する渦中にあり、もっと女性の研究者が科学の分野に参入していくことで、時間の経過とともに科学も変わっていく可能性があり、ご自身もそれを期待しているとお答えくださいました。

